

石田蕙一先生を送る

岡村定矩 (天文学専攻)

石田蕙一先生は、1956年に本学理学部天文学科を御卒業になり、その後本学大学院数物系研究科天文学専門課程に進まれ、58年に博士課程の半ばで、三鷹の東京天文台に助手として奉職されました。以来73年までの15年間に三鷹で、74年からの15年間に新設された木曽観測所で勤務され、88年からは再び三鷹の天文学教育研究センターにもどられ、本年3月末日をもって本学を停年退官されることになりました。この間、講師、助教授を経て84年に教授になられ、木曽観測所長、天文学教育研究センター長などを歴任され、今日まで天文学の研究と教育に専念して来られました。

石田先生が奉職された当時の東京天文台は、さまざまな業務を行うお役所の側面が強く、助手の研究は特別に許可をもらうかこっそりするものだという雰囲気があったとかで、今日と比べると隔世の感があります。こっそりなさったのかどうかは存じませんが、入台当初から先生は広い研究分野に関心をお持ちで精力的に研究を勧められました。とくに、散開星団と散光星雲、銀河および銀河系の構造、小惑星、彗星や新星などの突発天体、観測・測定装置の開発などで大きな業績を挙げられました。なかでも、木曽観測所のシュミット望遠鏡で撮影した多数の写真乾板を、エンジンバラ王立天文台の高速測定機で測定し、1万8千個の星の明るさと色のデータから、銀河系に、薄い円盤と球状のハローの中間的性質を持つ厚い円盤があることを確認した研究は有名です。

私が初めて石田先生にお会いしたのは72年頃です。修士課程の学生であった私は、銀河の観測をやって見たいと思い、毎週金曜に東京天文台で「銀河ゼミ」があるということを聞きつけ、出かけて行ったそのセミナーでお会いしたのが最初と

思います。新米の院生にはもちろんわからなかったことですが、当時は71年から始まった木曽シュミットの建設の最中であり、ゼミを主宰されていた高瀬先生がその建設を担当している銀河系研究室の室長で周囲は活気に溢れていました。石田先生は、銀河系研究室の新進気鋭の講師でした。石田先生は、67年から69年までテキサス大学に滞在され、マクドナルド天文台で観測を行われました。マクドナルドには91cm、208cmの望遠鏡があり、さらに270cmの大望遠鏡が建設中でした。60年にできた188cm望遠鏡を使ってまだ日の浅い我国で大型シュミットを建設する。そんな時マクドナルドで豊富な経験をお持ちの石田先生は推進役として打ってつけだったのです。

私は、石田先生御自身も携っておられた、銀河の表面測光を修士のテーマとすることになり、銀河写真の測定法などについて色々石田先生に教えていただいたり、議論したりしました。しかし、博士課程に進んでからはお会いすることが少なくなりました。石田先生は木曽観測所勤務となり、現地でシュミットの建設から観測所の立ち上げという大仕事を背負われ、東京で学生とつき合う時間があまりとれなくなったからです。

しかし78年に私は助手として木曽観測所に採用され、以来10年間石田先生と「同じ釜の飯を食べる」ことになったのです。当時の石田先生は、どちらかと言えばこわい先生でした。当初から現地責任者として、後には所長として、観測所の隅々まで熟知され、何事にも迅速な指示を出して観測所を運営されていました。私共は何事についても石田先生にお伺いをたてるというありさまでした。これは一つには、世界第四位というシュミット望遠鏡を擁する木曽観測所で、できるだけ多く

の学問的成果を挙げなければならないという先生の強い責任感の裏返しであったような気がしております。所長室をつぶして暗室に改造し、大型の自動現像機を導入したのも石田先生が所長の時代でした。

木曽は大変な山の中で文化も生活スタイルも都会とは違います。木曽天文台協会の後の宴会の締めくくりに「万歳三唱」があって学部長がカルチャーショックを受けられたと伺いましたが、石田先生も(?)私もそんな中にどっぷりと浸っていました。しかし、晩秋の朝、御岳山の初冠雪が青空に映える時や、厳しい冬が過ぎて残雪が消え緑が芽吹く時、木曽の自然は都会では決して見られない輝くような美しさでした。

観測所では春になると「境界巡り」と称して、借地の境界標を点検していましたが、途中からはたらの芽やうどなどの山菜の方が主目的になることもしばしばでした。雨の夜に突然水が出なくなり、200mばかり下った沢にある揚水ポンプの点検に、熊に襲われないよう携帯ラジオのボリュームを一杯にして皆で山を下りたこともありまし

た。石田先生はこわいばかりでなく、そんな時はいつも皆の先頭に立って歩かれたものでした。

木曽観測所は東京天文台の改組で大きく揺れ動きました。木曽の諸設備は実質的に全国の研究者の共同利用に供していました。大学附属となっても共同利用をきちんとサポートできるだろうか、国立天文台から離れて大型装置を維持し発展させる十分な予算が獲得できるだろうか。石田先生と私たち所員は長い長い議論をしました。多くの方々の御尽力により何とか見通しも立ち、木曽観測所は東大理学部に残ることになりました。石田先生は大晦日の夜まで調整に当たられたと関係者の一人から伺いました。

さまざまな天文学の分野での御研究と木曽観測所の建設を通じて、我国の観測天文学の育成に多大の貢献をされた石田先生に心からお礼申し上げます。石田先生をお送りするのは淋しいことですが、これを機に先生の御研究がまた新たな展開を迎え、ますますお元気で御活躍を続けられんことをお祈りいたします。

